『しんとく歴史散歩』総集編

広報しんとく　平成27年10月号～令和元年11月号に掲載

No.1　北海道鉄道敷設法と田辺朔郎
No.2　旧狩勝線―開通の日が新得神社のお祭りに―
No.3　「旧村形邸」―現存する新得町最古の住宅―
No.4　苦闘之碑
No.5　旧狩勝線と石切山
No.6　狩勝峠地蔵尊
No.7　日本八景狩勝峠
No.8　狩勝旧国道の桜並木
No.9　急行「まりも号」事件
No.10　松浦武四郎野宿之地
No.11　新内バッタ塚
No.12　新内駅逓所
No.13　旧新内小学校
No.14　新得小学校林地
No.15　新得亜麻工場
No.16　旧福山小学校
No.17　北新得墓地の無縁碑
No.18　新得家畜市場跡
No.19　北海道拓殖鉄道
No.20　新得山新四国八十八ヶ所
No.21　佐幌川流送跡地
No.22　佐幌川水力発電所取水口跡
No.23　新得駅逓所
No.24　新得町発祥の地
No.25　伊藤傳五郎住居跡
No.26　広内国民学校跡
No.27　畜産試験場軟石サイロ
No.28　新得小学校開校の地
No.29　藤川マキエ記念碑
No.30　旧新得機関区
No.31　上佐幌原野開拓発祥之地
No.32　南部神代神楽
No.33　旧佐幌小学校
No.34　菅野光民殉難之碑
No.35　旧上佐幌小学校
No.36　屈足開拓発祥の地
No.37　王子馬車軌道跡
No.38　屈足の水田発祥の地
No.39　カムイロキの地名由来
No.40　旧屈足十勝川渡船場
No.41　上川灌漑溝水門遺構
No.42　北海道拓殖鉄道「屈足駅」
No.43　新得営林署
No.44　岩松駅逓所
No.45　旧岩松小学校
No.46　岩松神社
No.47　岩松発電所殉難者慰霊塔
No.48　開発記念碑
No.49　旧上富村牛小中学校
No.50　大原始林開拓苦闘碑

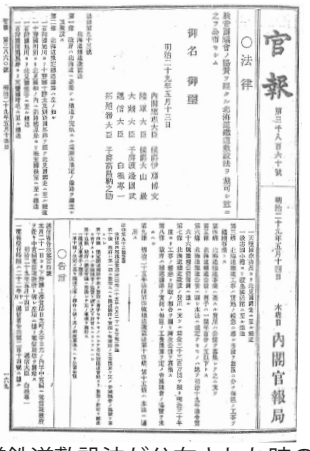
しんとく歴史散歩 No. 1

郷土の歴史を新得町郷土研究会がご紹介します 一緒に歴史の散歩に出掛けましょう

「北海道鉄道敷設法と田辺朔郎」

北海道官設鉄道十勝線（現ＪＲ根室本線）の新得駅が明治40年（１９０７年）９月８日に開業して今年で108年を迎えました。

敷設の端緒となったのが明治29年５月に公布された北海道鉄道敷設法です。


官報
第三千八百九十號　明治二十九年五月十四日　水曜日　内閣官報局
○法律
御名御璽
内閣総理大臣　伯爵伊藤博文
陸軍大臣　侯爵大山巌
海軍大臣　子爵樺山資紀
内務大臣　子爵芳川顯正
拓殖務大臣　子爵河野通之

北海道鉄道敷設法が公布された時の官報

この法律の第２条で旭川～十勝太（現浦幌町）～厚岸～網走に至るルートが建設予定線に組み込まれました。北海道庁は明治29年５月に臨時北海道鉄道敷設部を設け、田辺朔郎を嘱託技師に委嘱して建設に着手。明治30年に旭川から工事が始まり、同40年に旭川～帯広間が開通し新得駅と新内信号所（明治42年新内駅に昇格）が設置されました。このとき既に開通していた帯広～釧路間を合わせて釧路線と称されました。

南富良野から新得へ越えるルートは、石狩道路（串内から広内へ越える旧十勝国道路）ルートと狩勝峠ルートの２案に絞り込んで比較検討され、旧石狩道路ルートは勾配が緩やかだがトンネルが長大になるなどの難点があり、勾配は急だがトンネルが短くて済む狩勝峠ルートが採用されたといわれています。

このとき田辺朔郎は、石狩国と十勝国の国境に立ち、その一字ずつを採って「狩勝峠」と名付けました。この名前は、今日の国道38号線に引き継がれています。

田辺　朔郎氏
（田辺朔郎博士六十年史より）

しんとく歴史散歩 No. 2

郷土の歴史を新得町郷土研究会がご紹介します。一緒に歴史の散歩に出掛けましょう

「旧狩勝線ー開通の日が新得神社のお祭りにー」

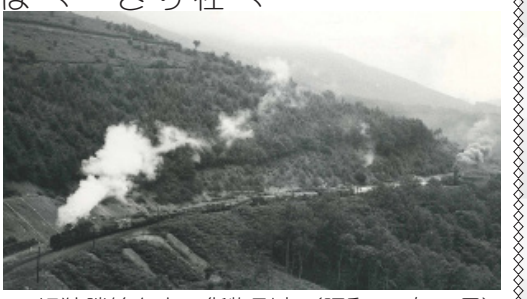
官設鉄道十勝線（旭川～帯広間）は、北海道内の物資や旅客の輸送の確保と軍事上の必要性から明治30（１８９７）年６月に旭川から敷設工事が始まりました。明治34（１９０１）年４月からは、通称狩勝線と呼ばれた落合～新得間（約28キロメートル）が着工されています。この年の７月からは狩勝トンネルの開削工事がトンネルの両側から始まり、固い岩盤と湧き水で工事は難航しましたが、明治38（１９０５）年１月になってやっと完成しました。

新内トンネル（延長１２４・３メートル）工事や新内沢大築堤工事も併せて進められ、明治40（１９０７）年９月８日に晴れて官設鉄道十勝線が開業し、新得駅と新内信号所（明治42年駅に昇格）が開設されました。明治42（１９０９）年10月には釧路線（帯広～釧路間）と合わせて旭川～釧路間が釧路線と称されました。後に鉄道開業の日の９月８日は、新得神社のお祭りの日とされました。

しかし、狩勝線は１０００分の25と急勾配のため、重い貨車を運ぶときに機関車を二重連結するなど輸送効率が悪く、石炭を機関車の釜に投入する機関士の労働環境も劣悪でした。また、狩勝トンネルが老朽化し、狩勝新線の建設に迫られていました。

こうして昭和41（１９６６）年９月30日、道央と道東を結ぶ鉄路として59年の歴史を刻んできた狩勝線は廃止され、翌10月１日に新線（現石勝線の一部）に切り替えられました。

昭和42年（１９６７）年からは、旧狩勝線のうち新内～新得間を利用して列車の脱線や火災実験が行われたりしましたが、現在は「狩勝ぽっぽの道」として利用されています。


旧狩勝線を上る貨物列車（昭和38年７月）

しんとく歴史散歩

No. 3

郷土の歴史を新得町郷土研究会がご紹介します。一緒に歴史の散歩に出掛けましょう

「旧村形邸」
―現存する新得町最古の住宅―

明治32（1899）年に北海道開墾組合の小作人募集に応じて山形県北村山郡高崎村（現東根市）などから13戸の方たちが新得に入植して116年が経過しました。これらの人たちは新得原野6号（新得高校前の道路）から11号（関木材佐幌工場付近）にかけて拝み小屋（三角形の掘建小屋）を建て、開墾に取りかかりました。

村形邸は、この時入植した13戸の一員の村形三吉さんが明治37、38年頃に建てたと言われています。村形さんは当初、新得原野11号付近に入植しましたが、その後現在地の元町49番地に移ってこられました。

明治33（1900）年になると佐幌地区に徳橋清助さんたち福井団体、同35（1902）年には屈足地区に中村良之助さんたち鹿児島団体、同39（1906）年には福山地区に渡辺栄三郎さんたち福島団体が入植し、住宅を建て開拓を推し進めていきました。

旧村形邸（昭和38年頃）

しかし、町内で開拓期に造られた住宅は、年月の経過により徐々に取り壊されていき、明治期に建てられて開拓の苦闘を伝える民家は少なくなり、現在では村形邸が最古のものとなっています。

村形邸は、木造平屋建て51・3坪（約169・4㎡）。外壁の下の部分は板張り、上の部分は土壁漆喰（しっくい）仕上げ。屋根は切妻屋根で板（柾）葺き（現在は長尺鉄板葺き）となっています。屋根には囲炉裏の煙出しが造られ、開拓期の歴史を語り継ぐ貴重な歴史的建造物と言われています。

新得町教育委員会では、歴史的な建物を残していく最後の機会と考え、修理・保存について検討しています。

郷土の歴史を新得町郷土研究会がご紹介します 一緒に歴史の散歩に出掛けましょう

しんとく歴史散歩

No. 4

苦闘之碑

狩勝高原エコトロッコ鉄道の北側に旧狩勝線開拓「苦闘之碑」がひっそりと佇（たたず）んでいます。昭和58年に新得町が町制施行50周年を記念して「字新内西5線140番地」に建てたものです。除幕式は新得町、開眼式は新得町郷土研究会により行われました。

旧狩勝線を含む官設鉄道釧路線（旭川～釧路間）は明治40年9月8日に開通しました。道央と道東を鉄路で結び、大量の物資や旅客を運ぶ幹線として重要な役割を果たしました。しかし、1000分の25という急勾配を抱えていた旧狩勝線は輸送の近代化の足かせとなり、昭和41年10月に新線に切り替えられ廃止となりました。

明治34年から同年40年にかけて行われた旧狩勝線の建設工事には、周旋屋により本州方面から騙されたりして集められたタコと呼ばれた多くの土工労働者が従事していました。彼らは工事現場近くに建てた飯場（タコ部屋）に押し込められて、粗末な食事を与えられるだけで日の出から日没まで強制的に働かされたと言われています。栄養失調や病気になっても医者に診てもらえず、たくさんの人が命を落としました。一説には、土中に埋められたり、トンネルの人柱にされたりしたとの話も伝えられています。

昭和58年7月31日に行われた「苦闘之碑」の除幕式

新得町の発展に大きく貢献した旧狩勝線建設の裏面には、こうした苦渋に満ちた悲しい歴史がありました。

町では町制施行50周年を機に、旧狩勝線建設に従事し苦闘の末、亡くなられた土工労働者の霊を慰めるため旧狩勝線近くの現在地に「苦闘之碑」を建立、昭和58年7月31日に開眼除幕式を行いました。以来毎年、新得町観光協会により慰霊祭が続けられています。

郷土の歴史を新得町郷土研究会がご紹介します
一緒に歴史の散歩に出掛けましょう
くとうん史歩し歴散
No. 5

旧狩勝線と石切山

新得市街から国道38号を狩勝峠の方向へ進み、6合目付近を右折して2キロメートルほど入ったところ（佐幌岳中腹）に石切山があります。ここには今も、岩石を採取した跡が残っています。

明治34年に旧狩勝線（新得～落合間・約28キロメートル）が着工され、この工事に石材を供給するため、工事に携わっていた関新太郎らによってこの石場が開発されました。

石は花崗岩（御影石）で、岩盤の規模は高さ40尺余り（約12メートル）、幅70尺余り（約21メートル）といわれています。今日のようなクレーンやトラックがない時代のため、大きな石は修羅（しゅら＝大きなそり）に積み込み、神楽算（かぐらさん＝船を引き上げるときに使うウインチ）で巻き寄せながら新内駅まで運び、鉄道輸送されました。

石切山で採掘された石は狩勝トンネルや新内トンネル、新内駅ホームのほか、線路の擁壁、忠魂碑、新得・新内・屈足小学校の門柱など多方面で使われました。また、北海道神宮の鳥居の笠石や北海道の三大名橋と謳（うた）われた釧路市の幣舞橋、旭川市の旭橋、札幌市の豊平橋にも使われるなど、産業と文化の発展に大きく貢献しました。

石切山

昭和2年に狩勝峠が平原の部で日本新八景に選ばれた時は、石切山で祝賀会が行われています。

戦後は経済変動により石の需要が減り、昭和28年に閉山となりました。その後、昭和38年に新たな企業により再開が試みられましたが、経営は採算に乗らず翌年再び閉山となりました。

新得町教育委員会では、開拓や産業の振興に大きく貢献した石切山を後世に伝えていくため昭和61年10月、狩勝高原の梅園近くに史跡銘板を設置しています。

郷土の歴史を新得町郷土研究会がご紹介します
一緒に歴史の散歩に出掛けましょう
くとうん史歩し歴散
No. 6

狩勝峠地蔵尊

官設鉄道十勝線の新得～落合間（旧狩勝線）は明治40年9月8日に開通、敷設工事は固い岩盤、出水などに悩まされました。また、列車の安全走行を守る保線の仕事も、多くの危険と困難を伴うものでした。

厳冬期の昭和7年2月26日、狩勝トンネル東口（新得側）にできた雪庇（せっぴ）を取り除く作業をしていた2人の保線区員が、雪崩に巻き込まれて殉死するという痛ましい事故がありました。狩勝保線分区（朝岡末治分区長）では、作業の安全を祈り、死者の霊を慰めるため翌昭和8年2月12日、国道38号線沿いの佐幌岳登山口付近に地蔵尊を建立、毎年8月24日に慰霊祭を行ってきました。

その後、心ない旅行者により地蔵尊が壊されるという出来事があり、昭和32年ごろ新しい像に造り変えられました。それを彫ったのが、かつて保線区で働いていた阿部喜之助さんと言われています。

しかし、鉄路の保線に伴うこうした事故は、鉄道が開通して間もないころから起きていました。このため保線区では、ほかの殉職者の霊も一緒に祀ろうということになり、古くは明治42年に雪崩で殉職された方や、近年では昭和42年に新得山トンネルで線路巡検中に亡くなられた方など19人が祀られています。

国道38号線の改良舗装工事が清水町との境界から狩勝峠に向かって始まり、地蔵尊が工事の支障になるため昭和41年10月1日、狩勝峠展望台から南へ約100メートル入った現在地に移設されました。現在そこには、犠牲になられた19人の名前を記した由来板が立てられています。また、地蔵尊のかたわらには、新得寺清野泰幹元住職の歌を記した看板があります。

狩勝峠地蔵尊のお祭り
（昭和32年8月24日）

郷土の歴史を新得町郷土研究会がご紹介します
一緒に歴史の散歩に出掛けましょう
くんとくんの史歩し歴散

No. 7

日本八景狩勝峠

明治から大正を経て昭和の時代に入り、これまでの日本の名所、景勝地は古い時代の感覚で定められており、新しい時代にあった景勝地を選ぼうという機運が高まりました。これを受け大阪毎日新聞と東京日日新聞（ともに毎日新聞の前身）は昭和2年4月9日、「日本新八景」を選ぶ取り組みをスタートさせました。

海岸・湖沼・山岳・河川・渓谷・瀑布・温泉・平原の八つのジャンルに分け、官製はがきの投票によって、それぞれ得票上位の場所を「候補地」とし、その中から当代一流の画家、作家たちによって構成した選定委員会で各ジャンル1カ所を「日本新八景」にしようとするものでした。

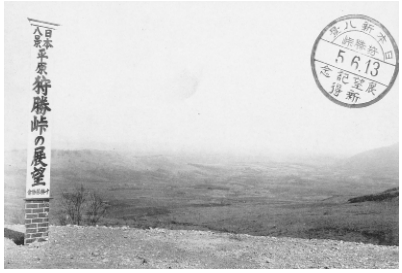
投票は5月20日で締め切られ、全国から寄せられたはがきは9348万枚に達しました。

選定委員会では十数時間にも及ぶ議論の末、海岸には室戸岬、湖沼は十和田湖、山岳は温泉岳（雲仙岳）、河川は木曽川、渓谷は上高地渓谷、瀑布は華厳の滝、温泉は別府温泉、平原には狩勝峠を決定しました。このほか「二十五勝」や「百景」など、数多くの風景地、名所、観光地が選ばれました。

平原の部では大分県の日田盆地が70万票余りでトップでしたが、選定委員会での審議の結果、約14万票で5位の狩勝峠が選ばれました。名称は投票募集のときは「日本新八景」となっていましたが、決定のときは「新」が取れて「日本八景」に変わっています。

十勝での運動は帯広商工会が中心となり進められました。特に坂井辰吉副会頭の努力に負うところが大きかったといわれます。

この「日本新八景」の選定は、近代の日本における観光の始まりとなったといわれています。



日本八景「狩勝峠」の展望
（昭和5年）

郷土の歴史を新得町郷土研究会がご紹介します
一緒に歴史の散歩に出掛けましょう
くんとくんの史歩し歴散

No.8

狩勝旧国道の桜並木

新得町で一番早く造られた道路は、道央と道東を結ぶ仮定県道南北線とされています。『北海道道路誌』によりますと、芽室坂で一時中断していた開削工事が明治31年に再開され、清水町石山地区から畜産試験場の西側の字新得西7線のオダッシュ山の北側鞍部を越えて南富良野町串内へ達し、明治32年に富良野まで通じています。明治33年に入植した山形団体の第二陣の人たちも、この道路を通って新得にやってきました。

しかし、この道路は明治40年の官設鉄道釧路線（旭川～釧路間）の開通で、あまり使われなくなり、荒れた状態になりました。このため、昭和6年に新内～落合間に新しい道路が造られました。翌年には、既設の新得～新内間の道路改良が行われ、晴れて新得から狩勝峠越えが可能となりました。自動車が通れる道路の完成は、住民にとって大きな喜びでした。

町内の青年団では昭和7年・昭和8年の春、道路の開通と狩勝峠日本八景当選を記念して、桜の木400本を新内駅から峠に向かって道路沿いに植えました。道路は昭和9年に国道に昇格し、一級国道札幌根室線と呼ばれました。桜並木は標高が高いため、遅咲きの桜として旅行客を楽しませました。

昭和27年に国道38号と名称が変わり、昭和42年に改良舗装工事に併せて道路の切り替えが行われ、現在の路線となりました。

古い道路は旧国道と呼ばれ、桜並木はその後も訪れる人の目を楽しませました。

昭和63年5月20日、旧青年団の方たちにより桜並木の保存と環境整備が行われ、同日、新得町教育委員会と郷土研究会により史跡銘板が立てられています。

旧青年団による桜並木保存と環境整備
（昭和63年5月20日）

郷土の歴史を新得町郷土研究会がご紹介します
一緒に歴史の散歩に出掛けましょう
とくしん史歩歴散

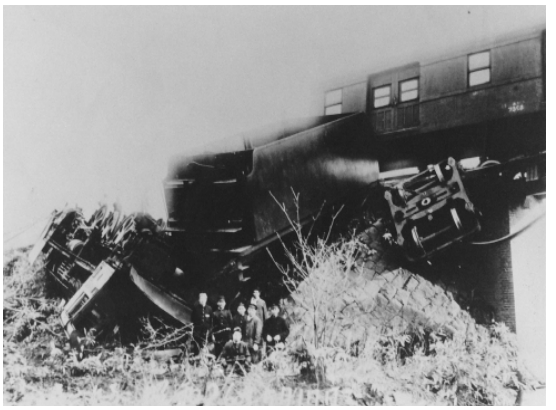
No. 9

急行「まりも号」事件

昭和26年5月17日、国鉄根室本線釧路駅発函館駅行きの上り急行四列車（愛称「まりも号」）は、470人の旅客を乗せて新得駅を夜中の午前1時5分に落合駅へ向けて出発しました。新内駅手前1・5キロ付近の上新内鉄橋に差しかかった午前1時15分、列車は激しい衝撃とともに先頭の機関車が左側に脱線、鉄橋下に転覆し、2両目のテンダ（石炭と水を積んだ車両）も鉄橋からずり落ちて垂れ下がるという事故になりました。

当時のまりも号は、機関車2両、荷物車2両、客車6両の10両編成で、曽我部機関士は軽傷を負ったものの、幸い乗客は全員無事でした。事故発生の通報を受けた自治体警察の新得町警察署（小畑善弥署長）は直ちに関係方面の応援を求めながら捜査にあたり、左右のレールの継ぎ目板4枚を金切りのこで切断し、白樺の棒をレールの下に差し込んで、レールを4センチメートル食い違わせたことが、脱線の原因であることが判明しました。戦後の下山、三鷹、松川の国鉄三大事件が発生したばかりであり、昭和23年には町内を中心に狩勝トンネル争議もあったので、捜査は広範囲にわたりました。容疑者600人の調査が行われ、鉄道知識を持った思想関係者説や、占領軍の謀略説もうわさとして流されましたが、決め手がなく、遂に迷宮入りとなりました。

この事件がきっかけとなり、自治体警察を広域の北海道警察へ移管させる機運が高まっていきました。



急行「まりも号」事件現場
（昭和26年5月17日）

郷土の歴史を新得町郷土研究会がご紹介します
一緒に歴史の散歩に出掛けましょう
とくしん史歩歴散

No.10

松浦武四郎野宿之地

新得町字新内にある佐幌ダムの西の道路を北へ5キロメートルほど進んだところの佐幌川べりに、松浦武四郎野宿之地と刻んだ石碑が建っています。箱館奉行所から東西蝦夷山川地理取調の命を受けた幕末の探検家の松浦武四郎の一行が、安政5（1858）年3月13日（新暦の4月26日）、狩勝峠の北を上川側から十勝側へ山越えして宿泊をした場所です。

10人のアイヌの人たちが道案内や荷物持ちを務め、盗賊の捕縛の命を受けていた箱館奉行所石狩（石狩市）詰めの役人の飯田豊之助が同行しました。武四郎にとっては6回目の北海道調査であり、十勝へ入ったのは4回目のことでした。

武四郎が書いた当時の記録『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』によると、一の沢が合流する付近の佐幌川は川幅が7、8間（1間は約1・8メートル）、平盤1枚岩で急流、左岸を行くにも切り立っていて進むことができず、やむなく佐幌川の右岸に渡り、大笹原を3、4丁（1丁は約109メートル）分け入り、トドマツの多いこの地に野宿したとあります。この後、武四郎たち一行は、佐幌川をパンケシントク川との合流点まで下り、ここから十勝川へ出て清水町人舞、芽室町などを経て豊頃町大津に出ています。

昭和62（1987）年7月27日、春木喜三郎さんの道案内で新得町郷土研究会のメンバー7人が現地調査をして、川底が一枚岩で武四郎の記録と合致するこの場所を野宿の地と特定しました。そして、同年11月2日、新得町と新得町郷土研究会により、松浦武四郎野宿之地の石碑と林道沿いの字新内西6線185番地に由来を記した銘板を立てました。

松浦武四郎野宿之地の石碑

郷土の歴史を新得町郷土研究会がご紹介します
一緒に歴史の散歩に出掛けましょう

くとぴん史歩し歴散

No.11

新内バッタ塚

明治12年（1879）に十勝管内中川郡の一部で発生していたトノサマバッタは、翌明治13年8月になると河西・中川両郡で大発生となり、大群となって日高管内を経て胆振管内へ飛来し、一群は海岸沿いに虻田方面へ、もう一群は札幌方面を襲いました。その様子は、音を立てて大風が林の木を揺り動かすようであり、またたく間に数百万、数千万のバッタが周辺を飛び交い、太陽が日食のように陰ったといわれます。地表は見渡す限りバッタで覆われ、足の踏み場もありませんでした。バッタが去った後は、青い物が一つも見当たらず、一面は剥ぎ取ったように地面が露出しました。作物は勿論のこと、外に干してある衣類までも食い尽くすという異常さでした。バッタは明治14年5月にも発生し、その勢いは前年に倍するものがあり、被害も激しいものでした。開拓使（明治15年からは札幌県と農商務省）は駆除費を計上して防除に努めましたが、バッタの害はさらに明治17年まで続き、防除費も膨らんでいきました。

新得町での駆除は、明治17年6月1日から同年8月14日にかけて行われました。発生地は佐幌川流域と佐幌岳山麓に集中していて、この時駆除したバッタの卵や成虫を埋めた土盛りが新内にバッタ塚として残されています。バッタの大発生は5年間続きましたが、明治17年の全道的な長雨により卵が腐ってふ化しなかったため、ようやく終わりをつげました。

新内に残されたバッタ塚は、開拓時代のことを現在に伝える貴重な史跡のため、新得町教育委員会では平成24（2012）12月に町の文化財に指定しました。

新内バッタ塚　平成24年8月28日

郷土の歴史を新得町郷土研究会がご紹介します
一緒に歴史の散歩に出掛けましょう

くとぴん史歩し歴散

No.12

新内駅逓所

新内地区には明治33年ころ、佐幌岳中腹の石切山から旧狩勝線工事に使う石材を切り出すため、岩手県人の関新太郎が入地しました。そして関は、明治36年に新内の国有未開地13戸分の貸し付けを受け、小作人を招いて開拓に取りかかりました。

明治40年9月には、待望の十勝線（現根室本線）旭川～帯広間が開通したことにより、北新内や東新内などの開拓が進展、さらに道路の開削、昭和2年6月には狩勝峠が日本八景に入選したことから、新内地区を往来する旅人が増加しました。

昭和3年に再選された佐藤伊久馬村長は、新内地区を通る旅人の便を考慮し、河西支庁（現十勝総合振興局）に駅逓所開設の請願を行い、昭和4年10月29日、字新内本通南1丁目4番地に官設の新内駅逓所が設置されました。

取扱人は福本義雄があたり、建物50坪、官馬1頭、私馬4頭、馬車1台を有し営業を行いました。

しかし、奥地開拓の落ち着きと鉄道利用の増加などから、昭和13年9月10日にその使命を終え廃止されました。

駅逓とは、開拓のために北海道へやってくる人や、旅をしている人に宿を提供したり、人や馬を貸し出したり、さらには郵便の取り扱いをしたりする制度のことでした。北海道内には、多い時で240カ所近くつくられ、開拓に大きな役割を果たしました。しかし、開拓が進むにつれて徐々に姿を消し、昭和21年には制度自体が廃止となりました。

ここには、新内の開拓の歴史を後世に伝えるため、新得町郷土研究会が平成12年10月20日に史跡標柱を設置しています。

新内駅逓所跡の標柱

郷土の歴史を新得町郷土研究会がご紹介します
一緒に歴史の散歩に出掛けましょう
とくしん歴史散歩
No.13

旧新内小学校

新内小学校は昭和8（1933）年11月、南新内尋常小学校と北新内尋常小学校が統合して、新得町字新内西1線142番地に開校しました。新内地区の開拓が進むにつれて人口が増加し、子供たちの教育の必要性が叫ばれるようになりました。また明治40（1907）年の官設鉄道十勝線の開通で新内信号場（後に駅に昇格）ができ、木材、農産物、花崗岩の集積地として移住者も増え、教育施設の必要性が高まっていきました。こうして、南新内尋常小学校は明治40（1907）年9月、新得簡易教育所新内特別教授場として字新内西5線125番地に開校し、その後、独立して新内教育所となりました。2度にわたる校舎移転を経て、大正6（1917）年に南新内小学校と改称し、児童数も40人を数えました。

一方、北新内小学校は、明治42（1909）年に青森、宮城、石川の各県からの入植により戸数が増え、大正6年に字新内西6線175番地に新内教育所付属北新内特別教授場として開校しました。大正6（1917）年に北新内尋常小学校へ昇格しました。しかし、この地域は、気象、土壌とも条件が悪く、移住者たちは次々と土地を離れていき、児童数が減少したことから、南新内小学校に統合されました。その後、昭和36（1961）年に現校舎が完成しましたが、昭和41（1966）年10月の新狩勝線の開通を契機に児童数が急激に減少し、昭和49（1974）年3月に67年の歴史を閉じました。

その後、学校を現状のまま保存するために改装が行われ、教室の一部は新内ホールとして催し物の会場に利用されています。

旧新内小学校（現在の新内ホール）

郷土の歴史を新得町郷土研究会がご紹介します
一緒に歴史の散歩に出掛けましょう
とくしん歴史散歩
No.14

新得小学校林地

新得町内で医院を開業していた仲田市太郎は、地域子孫百年後の隆盛を祈願して大正13（1924）年3月、字新得西4線50番地の造林地5ヘクタールを新得小学校の学校林として町に寄贈しました。

その後、この学校林を含む広内地区は、町が誘致した北海道農業試験場畜産部（現道立総合研究機構畜産試験場）の用地になるため、代替え地として北新内の町有林が充てられました。

ここに紹介する新得小学校林地の碑は、学校林が移転したことを後世に伝えていくため昭和56（1981）年10月4日、仲田市太郎の遺族の寄付を受けて新得町が現在地に建立しました。

仲田市太郎は千葉県出身の医師で、大正8（1919）年に新得町で仲田医院を開業しました。診療の傍ら、新得の山林が伐採されていることを憂い、私費を投じて土地を購入し、カラマツの苗木を育て植樹に励みました。小中学校、神社、寺院などには苗木や植樹林を寄贈し、広く木の大切さや植樹の必要性を説いたといいます。

当時町内には、豊富な森林資源があるため、植林はあまり顧みられることはありませんでした。こうした中での仲田医師の植林は、新得町の植林事業の先駆けになると共に、林業振興に大きな功績を残すものでした。

石碑の裏には、仲田医師が林地を寄贈するに当たってその活用法の希望を記した「造林地寄附ニ関スル希望」の文章が原文のまま模写されています。

その後平成19（2007）年に、仲田医師の遺族が、石碑を近くから見られるようにと階段を設置しました。

新得小学校林地（2009.9.17 撮影）

郷土の歴史を新得町郷土研究会がご紹介します
一緒に歴史の散歩に出掛けましょう

くとん史歩し歴散

No.15

新得亜麻工場

新得亜麻工場は大正9（1920）年11月、北海道亜麻工業株式会社の製線工場として屈足村字新得基線61、63、65番地（現本通北5、6丁目）で操業を始めました。初代工場長は加来彦太郎で、最盛期には従業員が130人ほどを擁する村の1大企業でありました。亜麻工場の進出は、原料となる亜麻の栽培を増加させ、村内の作付面積は大正15（1926）年に112ヘクタール、昭和9（1934）年には175ヘクタールへと増加しました。

北海道亜麻工業株式会社は、昭和5（1930）年12月に帝国製麻に吸収合併され、さらに昭和16（1941）年8月には太陽レーヨンと合併して帝国繊維となりました。

亜麻は船の帆布、服地、ズック靴、消防用ホース、ハンカチなどのほか、戦時中は軍事用の天幕、シート、飛行機の翼の材料などに使われました。

新得工場の原料の収集区域は、新得町のみであったので、これでは原料の亜麻が不足するため、清水町や御影村からも買い付けが行われました。

戦後帝国繊維は、財閥解体を目的とした過度の経済力集中排除法に基づき昭和25（1950）年7月、帝国製麻、中央繊維、東邦レーヨンの3社に分割され、新得工場は帝国製麻に属しました。そして昭和30（1955）年4月に中央繊維へ移管となって営業を続けましたが、安いナイロンなどの化学繊維に押され、昭和31（1956）年8月20日に閉鎖となりました。これに伴い、1954（昭和29）年に254ヘクタールを数えた亜麻の作付けも、1970（昭和45）年に姿を消しました。

現在、工場跡地には公営住宅（北生団地）が建ち、新得モータースクールが操業を行っています。

中央繊維新得亜麻工場
（昭和31年）

郷土の歴史を新得町郷土研究会がご紹介します
一緒に歴史の散歩に出掛けましょう

くとん史歩し歴散

No.16

旧福山小学校

旧福山小学校は明治41年（1908）6月1日、字新得西6線98番地に新得尋常小学校隧道澤（ずいどうさわ）特別教授場として開校しました。

隧道澤という地名は、明治期の開拓時代に、新得市街と旧狩勝トンネル工事現場を最短距離で結ぶ山道が、ペンケシントク川の沢筋の尾根伝いに付けられていたことに由来しています。この沢筋を含む福山地区がこの当時隧道澤と呼ばれていました。

隧道澤には、明治39年（1906）に福島県北会津郡湊村静潟から渡辺栄三郎を団長とする15戸が最初に入植しました。翌明治40年（1907）に石狩国美深村から古川金次郎ら2戸が、明治41年（1908）には福島県大鶴（おおつる）村字雫から佐藤寿、林長七が団体長となって16戸が入植し、人口が増加したため学校開設に至ったものです。

その後地名改称の要望が強まり、たまたま開拓地の視察に訪れた当時の横瀬農夫也河西支庁長から、入植者の出身地の福島県と山形県の名を取り「福山」としてはどうかとの話があり、そのとおり決定されたと言われています。

大正5年（1916）に福山教育所となり、翌大正6年（1917）に福山尋常小学校に昇格しました。戦後の昭和22年（1947）に福山小学校と改称されました。

昭和24年（1949）に字新得西6線91番地（現狩勝牧場事務所の東側）に新校舎が完成しましたが、昭和30年代に入ると離農が相次ぎ、昭和41年3月31日をもって新得小学校へ統合となりました。

ここには、平成20年（2008）11月に新得町教育委員会と新得町郷土研究会により史跡標柱が立てられています。

奥に見えるのが福山小学校

郷土の歴史を新得町郷土研究会がご紹介します
一緒に歴史の散歩に出掛けましょう
とくしん史歩し歴散
No.17

北新得墓地の無縁碑

明治40年（1907）9月8日に開通した官設鉄道十勝線（旭川～帯広間）は、新得の発展に大きな役割を果たしましたが、その敷設工事は困難を極めました。中でも難工事と言われたのが、滋賀県の志岐組が請け負った旧狩勝トンネル工事でした。

そこには、周旋屋によって本州方面からだまされて集められた多くのタコと呼ばれた土工労働者が働いていました。彼らは、工事現場近くに建てられた飯場（タコ部屋）に押し込められ、粗末な食事だけで日の出から日没まで長時間にわたって強制的に働かされました。栄養失調や病気になっても医者に診てもらえず、多くの人が命を落としました。一説では、土中に埋められたり、トンネルの人柱にされたりしたという話も伝わっています。

小トンネル工事には堀内組が下請けに入り、その傘下の掛田組の掛田万次郎こと佐々木藤三郎は明治37年（1904）8月、北新得墓地に1基の石碑を建立しました。そこには、工事の犠牲となったと思われる永尾六兵了以下10人の名前が刻まれています。碑の正面に「釈教順」と刻まれていることから、浄土真宗とゆかりがある人が関わって建立されたと考えられています。

建立から110年以上が経過し、碑の存在も忘れられるようになってきていますので、新得町の歴史を語る礎として今後も末永く保存していかなくてはなりません。

碑は時の経過により苔むし、傾きも大きくなってきたため平成24年（2012）10月、新得町郷土研究会が株式会社古川建設、弘願寺の協力によりすぐ近くの地盤の良い場所へ移設しました。

北新得墓地の無縁碑

郷土の歴史を新得町郷土研究会がご紹介します
一緒に歴史の散歩に出掛けましょう
とくしん史歩し歴散
No.18

新得家畜市場跡

十勝の開拓は、馬の活躍を抜きに語ることはできません。新得町においては、明治32（1899）年にパンケシントク駅逓所（新得駅逓所・鎌谷与七取扱人）に官馬7頭が配置されたのが、馬が見られた最初とされています。一般の農家においては、明治35（1892）年に佐幌の岩瀬豊吉が最初に馬を導入しました。

日清戦争で馬の果たす役割が重要視されるようになり、馬の改良、増産が国策として進められていきました。

当時馬の競売を行う家畜市場は、十勝国産牛馬組合が主催して十勝管内7カ所で行われていました。新得でいつ頃から開かれるようになったのかはっきりしていませんが、大正4（1915）年には既に新得町字新得西1線50番地（現やすらぎ荘付近）で開催されていました。

大正12（1923）年4月には国有種馬屈足種付所（同13年に新得種付所と改称）が新得家畜市場に隣接して設置されました。しかし、家畜市場は新得小学校に近い上、鉄道の踏切があり、時にはパンケシントク川の決壊があるため、屈足種付所と合併して大正15（1926）年に新得町栄町123番地（現栄町団地）に移転となりました。

新得家畜市場は芽室町以西を管轄しており、鉄道利用の便利さから春秋の競りの日には、全国各地から購買客が集まりました。このため、競りが行われる前後は旅館や料理店がにぎわっていました。その後、昭和23（1948）年に関係法令が廃止となり、種付所は解散し、家畜市場は農業協同組合に引き継がれましたが、馬産は年々衰退し、牛を中心とした家畜品評会や家畜祭へと変化していきました。

家畜市場の様子

郷土の歴史を新得町郷土研究会がご紹介します
一緒に歴史の散歩に出掛けましょう

とくしん史歩歴散

No.19

北海道拓殖鉄道

十勝北部の産業の発展と開拓民の定住促進を図るため、大正10（1921）年6月、菊田豊之助や湯浅伝吉ら発起人34人で鉄道大臣に地方鉄道敷設を出願し、2年後の大正12（1923）年11月に認可が下りました。これを受け、大正14（1925）年4月、東京市において北海道拓殖鉄道株式会社が創設されました。

鉄道計画は、国鉄新得駅を起点に、屈足、鹿追、士幌、上士幌を経由し、終点の国鉄池北線足寄駅に接続させるものでした。

大正14（1925）年11月に第1期工事として新得ー鹿追間の敷設に着手し、昭和3年12月15日に鹿追までの営業運転が開始され、地域住民の喜びはひとしおでした。工事はさらに進められ、中音更、そして昭和6年11月には上士幌まで延伸し、順次営業運転が開始されました。

しかし、人口の希薄な地域でもあり、農産物や木材の輸送が主体となっていたため、開業当初から多額の補助金を受けながらの赤字経営でした。

昭和21（1946）年に中木伊三郎が社長に就任し、戦後の混乱期の中で経営の健全化を図るため、路線の縮小、他の事業への進出により経営の多角化を進めることになりました。昭和24（1949）年9月には東瓜幕ー上士幌間を廃止して営業を続けましたが、施設の老朽化に加え、昭和37（1962）年8月の台風9、10号による鉄橋の流出や線路築堤の流出は経営の大きな痛手となりました。また、トラック輸送やマイカーの発達も経営に大きな影響を与えました。

このため、昭和43（1968）年3月に臨時株主総会を開いて鉄道廃止を議決し、同年7月31日をもって40年の歴史に終止符を打ちました。

北海道拓殖鉄道お別れ列車
（昭和43年7月31日）

郷土の歴史を新得町郷土研究会がご紹介します
一緒に歴史の散歩に出掛けましょう

とくしん史歩歴散

No.20

新得山新四国八十八ヶ所

昭和13（1938）年に発行された初めての新得町史とされる『郷土の研究』に、新得山は大師山と記されています。その名前の由来となったのが、新得山に開設された新四国八十八ヶ所でした。

新得の番外地（現元町）で酒造業を営んでいた脇清吉、タネ夫妻は弘法大師（真言宗の開祖空海）の信仰が厚く、タネが施すお灸は「大師のお灸」として有名となっていました。

ある時タネは八十八ヶ所霊場を開こうと思い立ち、加来彦太郎、黒田竹松、佐東粂治、北久松、宮脇数市ら多くの人たちの協力を得て昭和6（1931）年8月4日、新得山の東南山腹に新四国八十八ヶ所を開設しました。

参道の工事は中村信三郎が請け負い、その下で高橋金吾が石仏の建立を担当しました。脇清吉は四国零場の砂を持ち帰り、各札所に埋納しました。

霊場入口には、参拝者が休憩、宿泊をできるように大師堂が造営されました。堂内には弘法大師本尊が祭られ、後に脇清吉とタネの木像が安置されました。

山開きは毎年4月21日に行われ、全道各地からの多くの参拝者でにぎわいを見せました。

その後、中心となる世話人の高齢化により、平成22（2010）年に山開きが中止となり、そのまま八十八ヶ所が消えてしまうのではないかと心配されました。

こうした中で新得神社氏子会、新得仏教会、新得町郷土研究会などが協力して新得山新四国八十八ヶ所・一畑薬師保存会（古川盛会長）を設立、平成25（2013）年5月21日に4年ぶりとなる山開きが行われました。参道や傾いた石仏も補修され、80年以上続く伝統行事が継承されることになりました。

新得山新四国八十八ヶ所・一畑薬師保存会
設立総会（平成25年5月21日）

郷土の歴史を新得町郷土研究会がご紹介します
一緒に歴史の散歩に出掛けましょう

とくとん史歩し歴散

No.21

佐幌川流送跡地

新得町の開拓は、明治32（1899）年の山形団体の入植によって始まりましたが、当時の入植者は森林の伐採には手が回らず、森林に火をつけて燃やしてから開墾する方法が取られました。

しかし、入植者の増加により住宅建材や鉄道用の枕木、炭坑の坑木、紙用パルプ材の需要が増加すると、木を伐採して売り払い、副収入を得る人たちが現れるようになりました。

明治40（1907）年の釧路線（現根室本線）の開通によって新得駅が設置されると、駅から鉄道輸送が可能となり、木材の伐採がさらに進むようになりました。

佐幌川上流の新内の奥地は木材の宝庫で、冬山造材により原木が伐採され、馬などによって川のそばに集積されました。集められた原木は春の雪解け水で増水した佐幌川の水の力を利用して流送し、下流で新得市街側に陸上げされました。

この陸上げをした場所が、2条橋のすぐ北の新得町1条北2丁目付近です。陸上げした原木はバチバチ（馬そり）などで新得駅の土場まで運ばれ、ここから貨車で輸送されました。

また、新得には明治末期に平塚木工場が、大正初期には太田、増田、黒田の3木工場が操業しており、原木はこうした木工場に運ばれ住宅材や枕木などに加工されていました。

佐幌川の流送は明治末期から始まり、大正13（1924）年ころまで行われましたが、佐幌川上流部の原木の減少により終わりを告げることになります。流送跡地には、平成6（1994）年12月、新得町郷土研究会により史跡標柱が立てられています。

佐幌川流送跡地に立てられた史跡標柱

郷土の歴史を新得町郷土研究会がご紹介します
一緒に歴史の散歩に出掛けましょう

とくとん史歩し歴散

No.22

佐幌川水力発電所取水口跡

十勝管内の本格的な発電は昭和17（1942）年、新得町字屈足岩松地区の十勝川本流に建設された岩松発電所が最初で、ほかは戦後の急激な電力需要の増加により開発されてきたものです。北海道電力株式会社が本流で電力開発事業を展開し、電源開発株式会社が音更川、美里別川、利別川などの支流を中心に発電事業を行っています。

こうした大規模発電が始まる前に、中小河川では小規模な発電が早い段階から始まっていました。その先駆けとなったのが、大正4（1915）年に帯広で創立された帯広電気株式会社で、木炭ガスにより出力50キロワットの発電を行いました。

佐幌川では大正6（1917）年、帯広の実業家で道会議員の三井徳宝らが佐幌川水力電気株式会社を設立し、翌大正7（1918）年に、清水町字下佐幌17号付近に佐幌川水力発電所を建設しました。そして、南新得の基線1号付近の佐幌川から取水し、同発電所まで3キロにわたって水路を掘って水を引き、大正8（1919）年12月24日から出力300キロワットの発電を開始しました。

この間、佐幌川水力電気は帯広電気を買収して十勝水力電気と改称しています。

発電所には職員4、5人が常駐していましたが、昭和7（1932）年8月14日に豪雨と共に落雷があり焼失しました。

電気の供給が途絶えた町は元のランプ生活に戻ることになり、発電所の復旧を再三陳情しましたが徒労に終わったとされています。

佐幌川左岸の取水口跡には、コンクリート製の水門と堤が形をとどめており、平成8（1996）年に新得町郷土研究会により史跡標柱が立てられました。

佐幌川水力発電所取水口跡

郷土の歴史を新得町郷土研究会がご紹介します
一緒に歴史の散歩に出掛けましょう

とくしん史歩歴散

No.23

新得駅逓所

山形県高崎村（現東根市）から最初の開拓者が入った明治32（1899）年、帯広から石狩国旭川へ通じる道路（石狩道路）が開かれ、同年8月19日、新得8号線と交わるあたり（字新得西10線）に官設パンケシントク駅逓所が設けられました。

取扱人は、後に帯広でカマヤビルを経営する鎌谷与七で、官馬7頭、馬車1台を保有して経営を行いました。

翌明治33（1900）年に新得駅逓所に改称され、そしてこの年には高崎村から開拓第2陣がこの駅逓所を経由して新得に入植しました。

駅逓所の建物の概要はよく分かっていませんが、昭和30（1955）年の『新得町史』によれば、旦那衆用12畳1室、一般用6畳と8畳それぞれ1室の計3室あって、旦那衆の部屋は当時の官員が宿泊し、一般の旅人には使用させなかったとされています。

駅逓所の1日の利用者は7、8人で、多い時には30人にもなったといいます。また、旅芸人や絵描き、馬喰（ばくろう）など、いろいろな職種の人に利用されました。山奥のためエゾヒグマがたびたび出没し、1夜に馬2頭が犠牲になることもあったと言われています。

当時の駅逓経路は、串内（現南富良野町）から日高山脈を越えてパンケシントクに入り、ペケレベツ、芽室を経て下帯広（帯広市）に至るもので、明治40（1907）年の鉄道開通まで交通上重要な役割を果たしました。

しかし、鉄道が開通すると徐々に利用者が減少し、明治41（1908）年3月25日に廃止となりました。

新得駅逓所があった場所には昭和58（1983）年8月に新得町と新得町郷土研究会により史跡銘板が立てられています。

新得駅逓所跡

郷土の歴史を新得町郷土研究会がご紹介します
一緒に歴史の散歩に出掛けましょう

とくしん史歩歴散

No.24

新得町発祥の地

新得町の開拓の先駆けとなったのは、山形県高崎村（現東根市）の村山和十郎の指導の下に人舞村字新得に入植した村形三吉、後藤藤次郎、柴田久作、佐藤房吉、高橋元治、岡田長蔵、高橋菊次郎、原田熊五郎、早坂政蔵、岡田吉蔵、清野惣右衛門、椎名鶴五郎、石山善六の13人でありました。

彼らは明治32（1899）年4月、山形県を出て、船で青森から室蘭を経て十勝国大津へ向かいました。大津ではしけのため上陸することができなかったため、やむなく広尾で海が収まるのを待って、再度大津へおもむき、無事上陸することができたと言われています。

ここから陸路をたどり、モイワ（豊頃町茂岩）を経て下帯広村（帯広市）へ入りました。下帯広村で旅館に泊まり、翌日、芽室村を経て新得原野に足を踏み入れたのでした。

当時の新得原野は、カシワ、ナラ、ニレなど巨木が林立し、イバラ、スゲなどの身の丈を越える下草が生い茂っていました。

13戸の人たちは、新得6号から11号までの佐幌川西方に沿って三角屋根の掘っ立て小屋を建て、開墾に取りかかりました。

次の年の明治33（1900）年には山形県から橘井松五郎、橘井弥平を先導として約100人にのぼる第2陣がオダッシュ山の北側の鞍部を越えて新得原野に入り、開拓が本格化しました。

昭和30（1955）年、新得町により開拓50年を記念して南新得の1号線道路沿いに「新得町発祥之地」と刻んだ碑が建立されました。

また、この碑の隣には平成11（1999）年、開拓百年を記念して新得町により「開拓者をたたえる碑」が建てられました。

「新得町発祥之地」の碑

郷土の歴史を新得町郷土研究会がご紹介します
一緒に歴史の散歩に出掛けましょう

とくしん史歩歴散

No.25

新得町郷土研究会

伊藤傳五郎住居跡

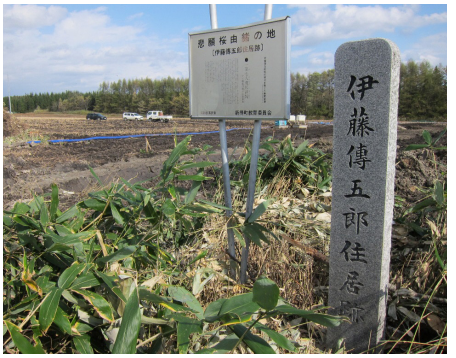
今から115年前の明治35（1902）年、宮城県遠田郡涌谷町から一人の開拓者がシントク原野に入地しました。新得神社山悲願桜の基となった伊藤傳五郎さんです。傳五郎さんは、明治40（1907）年の鉄道開通により新得停車場ができると、いつしか蒸気機関車に石炭を積み込む炭水夫として働くようになりました。

大正5（1916）年、42歳の働き盛りの傳五郎さんには、妻ナツヨさんとの間に3男3女の子どもがおり、幸せに暮らしていました。しかし、その年の12月28日午前2時30分、夜警中の新得巡査駐在所の大山巡査は、字新得基線36番地の傳五郎さん宅が火事であることを発見して駆けつけましたが、火の回りが早く、妻子7人は馬と共に焼死してしまいました。

絶望のあまり傳五郎さんは炭水夫を辞め、一旦郷里の涌谷町に帰りましたが、新得に戻ってきて鋳掛屋を始めました。そして、涌谷神社が桜の名所であることを思い起こし、妻子7人の供養の思いを込めて新得神社と新得寺に桜の木を植え始めました。大正8（1919）年には、新得神社が現在地に移転したのを記念して桜の苗木230本を新得神社に寄贈するなど、昭和3（1928）年ころにかけて植栽を続けました。

傳五郎さんの思いは町民や観光協会などに受け継がれ、今では2500本を数える桜の園になりました。この桜をいつしか人々は、悲願桜と呼ぶようになりました。

傳五郎さんの被災地には昭和（1985）60年3月、新得町教育委員会が郷土研究会の調査に基づき、「伊藤傳五郎住居跡」と記した石碑と由緒の地の説明板を建てました。



伊藤傳五郎住居跡に建てられた石碑と由緒の地の説明板

郷土の歴史を新得町郷土研究会がご紹介します
一緒に歴史の散歩に出掛けましょう

とくしん史歩歴散

No.26

新得町郷土研究会

広内国民学校跡

山形団体がシントク原野に入植した年と同じ年の明治32（1899）年9月、高知県人の弘内豊美が北海道庁からシントク原野西1線から西3線までの23戸分37万3490坪の貸付許可を受け、弘内以下12戸が入植しました。地域名の広内は、ここ弘内農場の名前を取って付けられました。しかし、開拓は成功せず、4年後には土地を返還しました。

それから10年後の明治42（1909）年5月に、秋田県から藤谷永吉ら12戸、明治44年には福島県から望木忠太郎ら12戸が入植し、広内地区の開拓が本格化しました。

入植者の増加により学校設置の声が高まり、大正5（1916）年2月14日、日高山脈山麓の字新得西6線84番地に新得尋常小学校所属広内特別教授場が開校しました。大正8（1919）年ころには開拓者が50戸を数え、同年9月には待望の校舎が完成し、笹葺き小屋から引越しをすることができました。そして、翌大正9（1920）年8月21日に広内尋常小学校に昇格しました。

戦時中の昭和16（1941）年4月1日に、日本国内の全ての尋常小学校は国民学校に名前が変わることになり、同校も広内国民学校に改称されました。

しかし、大正6（1917）年の35人をピークに児童数は減少を続け、昭和18（1943）年には5人となり、その後の新入生の見込みもなくなりました。このため、同年10月の新得町議会で閉校が決定され、昭和19（1944）年2月7日、新得国民学校に統合になりました。

ここには平成19（2007）年10月、新得町教育委員会と新得町郷土研究会により史跡標柱が立てられました。

広内国民学校跡に立てられた石碑

郷土の歴史を新得町郷土研究会がご紹介します
一緒に歴史の散歩に出掛けましょう

くとん史歩し歴散

No.27

畜産試験場軟石サイロ

昭和20（1945）年8月15日の終戦により、敗戦国日本の統治のため連合国軍が進駐してくることになりました。

北海道においては、札幌市真駒内にあった北海道農業試験場畜産部が進駐軍の施設として接収命令を受け、代替え地を求めることになりました。本別町、清水町、御影村、新得町などが名乗りを上げ、誘致合戦が繰り広げられましたが、昭和22（1947）年3月1日に新得町への移転が決定されました。

戦後の物資不足の中で畜舎や職員官舎などの整備が進められ、真駒内にあった札幌軟石で造られた第5牛舎サイロも解体して新得に運び、昭和23（1948）年12月に現在地に復元されました。それ以来、サイロは乳牛の飼育のために利用されてきました。

サイロは高さが15メートル、内径が5・5メートル、容積は282立方メートルあり、730個の軟石が使われています。

サイロは真駒内時代に、たまったメタンガスにより破裂したため、鉄の帯を巻いて補強されました。その痕跡を残す軟石が所々で使われており、当時の苦難を物語っています。

昭和62（1987）年2月に、古くなった試験牛舎が不用になって解体されましたが、このサイロは真駒内時代を伝える建造物として、由来板を立てて保存されることになりました。

平成12（2000）年に滝川市の小家畜を統合して北海道立畜産試験場に生まれ変わり、これまでの建造物は全て改築され、新しい体制で試験研究が進められることになりました。

しかし、この軟石サイロは、歴史を刻む貴重な建造物として残されることになりました。

畜産試験場軟石サイロ

郷土の歴史を新得町郷土研究会がご紹介します
一緒に歴史の散歩に出掛けましょう

くとん史歩し歴散

No.28

新得小学校開校の地

山形団体がシントク原野に開拓のクワを入れてから2年目の明治34（1901）年、早くも戸数は69を数え、学齢期に達した児童の教育の必要に迫られました。

当時、新得地区の教育行政の代表であった組長の橘井重助らは明治34（1901）年7月5日、芽室外6ケ村戸長塩田源蔵に対し簡易教育所設置を要請すると共に、橘井重助、村形三吉、玉川半兵衛、清野忠蔵ら建築委員は村内各戸に1円の寄付を呼びかけ、建設に取りかかりました。しかし、工事半ばで資金が不足して工事が滞りましたが、幸い狩勝トンネル工事請負人から100円の高額寄付があったので、明治35（1902）年10月4日、新得町西1条北2丁目（現新得労働会館付近）に草ぶき掘立小屋24坪（79・2平方メートル）の施設が完成しました。

こうして、新得小学校の前身である義務教育4年制の公立新得簡易教育所が開校しました。開校当時の児童数は23人余りでしたが、明治40（1907）年に官設鉄道釧路線の開通により移住者が急増しました。このため児童数も増加し、翌年4月に新得尋常小学校に昇格し、併せて義務教育年限が6年に改正されました。しかし、校舎の増築が間に合わず、新得寺の本堂を仮校舎に使用して教育が行われました。

明治41（1908）年11月に、小学校設備規則に準拠した柾（まさ）ぶきの木造平屋建て62坪（206・3平方メートル）の新校舎が落成しました。

新得小学校の前身の新得簡易教育所があった場所には昭和62（1987）年11月、新得町教育委員会と新得町郷土研究会により「新得小学校開校の地」の碑が建てられました。

新得小学校開校の地の碑

郷土の歴史を新得町郷土研究会がご紹介します
一緒に歴史の散歩に出掛けましょう

とくしん史歩歴散

No.29

藤川マキエ記念碑

社会福祉法人厚生協会わかふじ寮の基礎をつくった藤川マキエは、明治31（1898）年11月に香川県丸亀市で生まれました。大正8（1919）年に樺太（サハリン）に渡り、大正15年に豊原市（ユジノサハリンスク）で私立藤川実践女学校を創設し、校長として女子教育に尽力されました。

戦後の昭和23（1948）年に北海道の喜茂別村に引き揚げ、農村女性のために裁縫教習所を開設しました。昭和25年6月に御影村（清水町御影）の北海道ろうあ農志塾家庭学園主任指導員となり、ここが昭和27年5月に社会福祉法人御影学園として設立認可を受けたので、引き続き同学園の主任指導員を務めました。

昭和28年4月に田中皎一と共に新得町に移り、田村政雄や社会福祉協議会などの協力を得て身体障害者授産施設わかふじ寮を創設しました。その後施設長や社会福祉法人厚生協会理事長などを歴任したほか、昭和56年には全国に先がけて聴覚障害者養護老人ホームやすらぎ荘を開設するなど、今日の厚生協会の基礎をつくりました。

施設利用者からは、ろうあ者の慈母と慕われましたが、昭和60年1月13日88歳の生涯を閉じました。葬儀には藤川実践女学校の教え子たちもお別れに訪れました。

この間、昭和35年4月に厚生大臣表彰、昭和46年4月に勲5等瑞宝章、昭和54年7月には新得町開基80周年記念式典で新得町名誉町民の称号が贈られました。

昭和61年の1周忌法要に当たり、同年9月23日に、記念碑建立期成会（田中皎一会長）により新得町西3条北1丁目に藤川マキエ記念碑が建てられました。

藤川マキエ記念碑

郷土の歴史を新得町郷土研究会がご紹介します
一緒に歴史の散歩に出掛けましょう

とくしん史歩歴散

No.30

旧新得機関区

鉄道開通からちょうど10年後の大正6（1917）年4月16日、南富良野村（南富良野町）落合に設けられていた機関庫（機関区）が屈足村新得に移転し、新得機関庫として開設されました。この移転は、狩勝峠という旧釧路線（旭川―釧路間）最大の難所に対応するためのものでありました。

機関庫はアメリカ式の扇型で、面積は約2000平方㍍。転車台が整備され、機関車10両を格納することができ、当時は道東一の偉容を誇ると言われました。建物の側面は木造れんが張りで、壁の低い部分は石切山の花崗岩が大量に使われていました。

機関庫での業務は、機関車の点検整備や給水、給炭などがあり、急こう配の狩勝峠を越える時は、機関車を2両または3両連結するため重労働の連続であったと言われています。

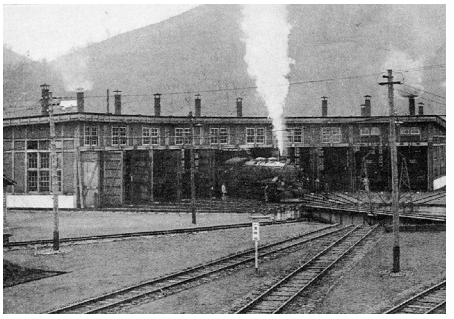
昭和28（1953）年に機関区の庁舎と車庫が改築され、同時に石炭台の増築が行われました。

昭和41（1966）年10月の新狩勝トンネルの開通に伴い機関車の動力がディーゼル化されました。これにより、動力車の基地が釧路機関区に統合され、機関車と57人もの乗務員が新得を去ることになりました。

その後、帯広運転区へ統合されて派出所に縮小されたほか、国鉄の分割民営化などにより、平成4（1992）年7月をもって全面的に廃止となり、町のシンボルであった機関区は75年の歴史を閉じました。

機関区は平成6（1994）年8月に解体され、転車台はニセコ町に移設して展示されています。

町の発展の礎となった新得機関区車庫跡には、平成27（2015）年12月に新得町教育委員会により史跡銘板が設置されています。



新得機関区車庫

郷土の歴史を新得町郷土研究会がご紹介します
一緒に歴史の散歩に出掛けましょう

とくしん史歩歴散

No.31

上佐幌原野開拓発祥之地

佐幌川東岸の高台に位置する上佐幌原野は、開拓者に貸し付けや払い下げを行うため明治21（1888）年に北海道庁により入植適地として選定され、明治32年から区画の測量が始められました。原野の中央に南北に基線を引き、それと並行に東と西に線が引かれ、そして基線と直角に交わるように東西に号線を引いて碁盤の目のような区画がつくられました。

ここには、福井県越前団体の徳橋平左衛門が250戸分（1戸約5ヘクタール）の貸付許可を受け、その長男の徳橋清助、次男の徳橋徳松、斉藤友吉らが明治33（1900）年に上佐幌3号付近に入植して開拓が始まりました。この時、清助らは小樽から貨物列車で上富良野に入り、旧狩勝線測量跡をたどって同年5月2日に新得原野の村形三吉宅に宿泊し、翌日上佐幌原野に入植したと伝えられています。この年の秋には、岩瀬豊吉、後藤栄吉らが入植して開拓が本格化し、明治末期には140戸の農家を数えました。

一方、上佐幌原野の上地区（現上佐幌地区）は、明治40（1907）年に新潟県佐渡の本間敬蔵を団体長として入植が始まりました。以後毎年のように入植者が続き、開拓は上佐幌原野全体にまで広がりを見せました。

開拓の苦闘を後世に伝えるため、昭和63（1988）年10月15日、新得町教育委員会と新得町郷土研究会により、最初に開拓者が入った字上佐幌基線20番地付近に「上佐幌原野開拓発祥之地」と刻んだ石碑が建てられました。その後、石碑は営農の支障になるため、佐幌農業会館敷地内に移設されました。

上佐幌原野開拓発祥之地碑

郷土の歴史を新得町郷土研究会がご紹介します
一緒に歴史の散歩に出掛けましょう

とくしん史歩歴散

No.32

南部神代神楽

楽しみが少ない開拓時代に出身地の母村から持ち込まれ、忙しい農作業の合間を縫って練習を重ねながら伝えられてきた郷土芸能に南部神代神楽があります。

これは、大正初期、岩手県大東町から入植した菅原健次郎（清水町人舞）、吉田喜三郎（新得町字上佐幌）らによって持ち込まれたものと伝えられています。

南部神代神楽は岩手県一関市の笹谷流神楽の流れを組む下猿沢南部神楽が庭元とされ、佐幌神社や佐幌地区の地神さんのお祭りなどで舞われてきました。昭和初期に佐幌神社が新得神社に合祀された後は、一時期、新得神社でも舞われていたと言われています。

下猿沢南部神楽には、「鳥舞」など20数種類の踊りがあり、それが南部神代神楽に取り入れられました。

戦後、南部神代神楽は途絶えてしまいましたが、昭和47（1972）年、新得文化協会の協力もあって佐幌地区の農村青年の手で保存会がつくられ復活しました。

しかし、農村青年たちが営農の中核を担うようになると練習に出られなくなり、このため、昭和54（1979）年に佐幌小学校児童により新得町神楽保存少年団が結成され、伝承されることになりました。

佐幌小学校は平成19（2007）年3月末で閉校となり、神楽保存少年団の今後のあり方が検討されましたが、最終的には佐幌地区内で少年団を維持するのは困難とする意見が大勢を占め、神楽の火が消えることになりました。

その後、平成22（2010）年に新得神社氏子会が中心となって少年団の復活を試みましたが、応募がないまま今日に至っています。

南部神代神楽を舞う神楽保存少年団

郷土の歴史を新得町郷土研究会がご紹介します
一緒に歴史の散歩に出掛けましょう

とくしん史歩し歴散

No.33

旧佐幌小学校

佐幌地区の開拓は明治33（1900）年、越前団体6戸が入植したことが始まりで、その後毎年のように入植者が続いて原野が拓かれていきました。学齢児童が増加するのを見た越前団体長の徳橋清助は、明治35（1902）年頃、草ぶき掘立小屋の自宅半分を開放し、児童10人ほどを集め、自らが教師となって授業を行いました。この私塾は「上佐幌塾」と言われ、後に新得簡易教育所上佐幌出張所（佐幌小学校の前身）となりました。

その後、児童数が増えたことから明治39（1906）年7月5日、上佐幌簡易教育所が児童数23人、1学級編成で字上佐幌基線20番地に開校しました。明治45（1912）年8月に上佐幌尋常小学校に昇格し、幾多の変遷を重ねて昭和22（1947）年4月に佐幌小学校となりました。

地域の教育、文化の拠点として1000人を超える卒業生を社会に送り出しました。

しかし、時を経て農家戸数の減少と少子化が進行し、平成19（2007）年3月末を以て閉校のやむなきに至り、新得小学校へ統合されることになりました。

平成19（2007）年2月11日に、佐幌小学校開校百年記念・閉校式典が同校で行われ、閉校記念のプレートが、80周年記念で設置された「希望の郷」の碑の横に設置されました。

なお、学校は、平成19（2007）年11月から厚生協会わかふじ寮のペットフード製造工場として使用されています。

旧佐幌小学校

希望の郷の碑

郷土の歴史を新得町郷土研究会がご紹介します
一緒に歴史の散歩に出掛けましょう

とくしん史歩し歴散

No.34

菅野光民殉難之碑

菅野光民は明治9（1876）年に岡山県で生まれました。後に北海道に渡り、小樽新聞帯広支局長を経て大正2（1913）年8月、卓越した識見と行動力を買われて北海道会議員に当選しました。大正4（1915）年に十勝日日新聞社を創設し、マスコミ人としても活躍しました。

菅野道議は、未開発であった十勝川上流の森林、鉱物、農用地利用、観光資源などの調査を目的に大正7（1918）年6月7日、屈足村からアイヌ2人を道案内にトムラウシに入りました。同月8日オソウシ温泉地帯、9日にはニペソッ川との合流点へと調査を進めましたが、その帰路に突然、笹やぶから巨熊が現れ、驚いた案内人が村田銃を発砲しました。しかし、不覚にも手負いにしたため、警戒をしながら歩みを進めましたが、ピシカチナイ川付近にさしかかったところ、手負いの熊が最後尾にいた菅野道議に襲いかかり、帰らぬ人になりました。

十勝日日新聞社の理事であり友人でもあった林豊州は、菅野道議の遺志を受け継ぎ、翌年に十勝毎日新聞を創刊しました。

菅野道議の犠牲が端緒となってトムラウシ一帯の開発が進められることになったため、その進取の精神を後世に伝えようと十勝毎日新聞社の協力を得て新得町により昭和60（1985）年11月3日、ニペソッの現在地に菅野光民殉難之碑が建立されました。題字は林克己十勝毎日新聞社会長が揮毫し、碑文は新得町郷土研究会が作りました。

平成30（2018）年6月9日に没後100年を迎え、前日の8日には記念の慰霊式が碑の前で行われました。

菅野光民殉難之碑除幕開眼式
（昭和60年11月3日）

郷土の歴史を新得町郷土研究会がご紹介します
一緒に歴史の散歩に出掛けましょう

とくしん史歩歴散

No.35

旧上佐幌小学校

学校は開拓時代から地域と共に歩み、そして歴史を刻んできました。上佐幌小学校もそんな学校の一つです。

上佐幌地域の開拓は明治40（1907）年4月、本間敬蔵を団体長とする新潟県人と福島県人、徳島県人の手により始められました。「上佐幌の発展は教育にある」との思いから、先人たちは明治41（1808）に学校設置の運動を起こし、同年11月24日、河西支庁（現十勝総合振興局）から特別教授場の設置認可を受けました。字上佐幌基線73番地の公用地に草ぶき、茅囲いの掘っ建て40平方㍍の校舎を建て明治42（1909）年4月1日、児童数20人、1学級で上佐幌簡易教育所（旧佐幌小学校）所属上佐幌特別教授場が開校しました。

明治44（1911）年2月に、ストーブの過熱により校舎が全焼するという災害に見舞われましたが、地域の努力により同年4月、木造で柾（まさ）ぶき掘っ建て小屋50平方㍍校舎が再建されました。

大正5（1916）年3月17日に独立して上佐幌教育所に昇格し、翌大正6年4月1日に上佐幌尋常小学校となりました。

戦時体制下の昭和16（1941）年4月1日、上佐幌国民学校に改称されましたが、戦後の教育改革により昭和22（1947）年4月1日に上佐幌小学校になりました。

平成元（1989）年12月に鉄筋コンクリート造り平屋建て810平方㍍の立派な校舎が建てられ、平成8年からは山村留学にも取り組まれました。しかし、農業人口の減少や少子化などにより平成16（2004）年3月、900人余りの人材を世に送り出し、95年の歴史を閉じました。

旧上佐幌小学校

郷土の歴史を新得町郷土研究会がご紹介します
一緒に歴史の散歩に出掛けましょう

とくしん史歩歴散

No.36

屈足開拓発祥の地

本州などからの移民を受け入れるため明治21（1888）年、北海道庁により行われた殖民地選定調査で、屈足原野が殖民地として選定されました。明治34（1901）年に原野の具体的な測量が実施され、農家1戸分の面積は、おおむね5町歩（約5㌶）として区画割りがなされました。

明治34年12月、鹿児島県財部村の第6代村長であった東郷実夫が開墾を目的に290町歩の貸付予定地の許可を受け、翌明治35（1902）年5月、上原善之助ら小作人7戸が初めてこの原野に足を踏み入れました。

当時は官設鉄道十勝線の建設工事がたけなわで、一行は南富良野町落合までは汽車に乗り、落合からは石狩道路を歩き、串内、シントク原野、上サホロ原野を経てようやく屈足原野にたどり着きました。屈足原野は原生林が広がり、佐幌高台からこの状況を見た一行9戸の内の2戸は、移住をあきらめて郷里へ引き返したと伝えられています。

残った7戸は屈足19号近くの西2線2番地に掘っ立て小屋を建て、開墾に取りかかりました。

松元正盛著『大地を拓いて』によれば、この時の入植者は上原善之助、安楽正之助、西田末蔵、中村良之助、池上和蔵、山田愛助、宮坂伝助ら7戸30人でありました。東郷実夫も村長を辞して明治36（1903）年に家族を連れて屈足へ移住しましたが、後に札幌市へ転出しました。

最初に開拓された場所には昭和61（1986）年に町教育委員会と町郷土研究会により「屈足発祥之地」の標柱が立てられ、後に除雪の支障になるため石柱化されて屈足25区公民館の敷地内に移設されました。

屈足開拓発祥の地の碑

郷土の歴史を新得町郷土研究会がご紹介します
一緒に歴史の散歩に出掛けましょう

くとん史歩し歴散

No.37

王子馬車軌道跡

十勝川上流部に眠る森林資源は、開拓地から遠く離れているため手が付けられないでいましたが、これにいち早く着目した王子製紙は、大正2(1913)年12月、十勝川上流（国有林）の立木払い下げを北海道庁（当時国有林を管理）と契約し、翌大正3年から調査を開始しました。

伐採されたパルプ用の丸太は、一旦帯広へ流送し、そこから苫小牧へ鉄道輸送することが検討されました。しかし、流送距離が長くなることから、同社山林部の小林準一郎（後の王子製紙副社長）は、馬車軌道を敷設して輸送することを計画しました。

そして大正7、8（1918、19）年頃、屈足市街のすぐ北の十勝川に網場（木材の貯留設備）を設け、上流部から流送されてきた丸太をここで川土場に引き上げました。ここから敷設された馬車軌道を使って屈足22号の佐幌高台の下まで出て、佐幌高台を斜めに上って上佐幌1号付近を越え新得駅土場まで運ばれました。春から秋にかけはこの馬車軌道が利用されましたが、冬は馬そりが使われました。

この馬車軌道は、地域の人たちから馬鉄（ばてつ）の愛称で親しまれ、時には学童や地域の人たちが便乗させてもらうなどの風景も見られました。

昭和3（1928）年12月、北海道拓殖鉄道の開業により馬鉄を使っての丸太の輸送は屈足駅までとなり、昭和9年には動力が馬からガソリンエンジンに変わったため、馬車軌道は姿を消すことになりました。

平成元（1989）年9月、馬車軌道の中間に当たる屈足22号の坂下に新得町と新得町郷土研究会により史跡銘板が立てられました。

馬鉄跡地史跡銘板

郷土の歴史を新得町郷土研究会がご紹介します
一緒に歴史の散歩に出掛けましょう

くとん史歩し歴散

No.38

屈足の水田発祥の地

屈足地区の開拓は明治35（1902）年から始まりましたが、開拓民の多くは米作りに強い関心を抱いていました。

大阪河内の人で帯広に住んでいた森口茂吉は明治41(1908)年、屈足原野の国有未開地50戸分、250町歩の貸付を受け、小作人を招いて開拓に着手しました。

茂吉の息子の森口忍は明治45（1912）年、父親の水稲栽培の強い意向を受け屈足村字屈足西1線65番地に移住し、帯広から労働者を雇い入れて開田の上、水稲の栽培に着手しました。水田の水は、屈足30号の沢水を使いました。

最初は、品種の不適格と稲作技術の未熟により、草丈ばかり伸びて実が入らないという状況が続きましたが、大正2、3（1913、14）年頃、永山村（現旭川市）から宮越惣太郎を招いて水稲栽培の手ほどきを受け、ようやく実るようになりました。その後稲作は地域一帯に広がり、森口も大正8（1919）年には豊作に恵まれ100俵もの収穫がありました。

戦前から戦後にかけては「屈足三等粳（うるち）玄米」の銘柄で流通し、多くの家庭の食卓に上りました。

しかし、本州などでは品種改良によりおいしい米が作られるようになり、また、国内の米の生産量も増加傾向が続き、米が余るようになりました。

このため、昭和45（1970）年から始まった国の稲作転換政策により、屈足の稲作は60年余りで終わりを告げました。

昭和61（1986）年8月に、森口忍が開田に着手した近くの字屈足基線66番地には、新得町郷土研究会により屈足水田発祥之地の碑が建てられています。

屈足水田発祥之地史跡石柱

郷土の歴史を新得町郷土研究会がご紹介します
一緒に歴史の散歩に出掛けましょう

とくしん史歩歴散

No.39

カムイ口キの地名由来

十勝川左岸を南北に走る美蔓台地（屈足高台）の27号付近に形成されているガンケは、狩勝峠からも望めることができる屈足地域のシンボル的存在です。

ここから、約3キロメートル上流の十勝川左岸にあるのがカムイ口キと呼ばれる場所です。陸軍の陸地測量部が明治29（1896）年に作成した『北海道仮製五万分一図　クッタラウシ』に「カムイ口キ」と記されています。

この地名はアイヌの人たちが名付けたもので、「カムイ・口ク・イ　神が・座る・所」の意味と訳されています。

最初に文献で紹介したのは幕末の探検家の松浦武四郎です。松浦は『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』に「カムイ口キは此の川（十勝川）の東岸断崖峨々たる壁岩の色灰白色なる大岩の半復（中腹）に穴有。是に昔より神霊有るによつて、此処へ行こと敵はざるが故に、此方より木幣を奉るによつて号るとかや」と記しています。つまり、崖の大岩の中腹に穴があって、そこには神霊が宿っていて行くことができないので、木幣（イナウ）を奉っているためカムイ口キと名付けられたとしています。

同じ松浦の『十勝日誌』には、「昔一人がこの岩壁の上から綱を下げ、それを伝って穴に入ったことがあったが、帰って来なかった。その子も同様に試みたが、その子も戻って来なかった。それ以来この洞穴に入ることは禁じられている」と記されています。

このカムイ口キを望むことができる湯宿くったり温泉レイク・インの駐車場には、平成5（1993）年に新得町教育委員会と新得町郷土研究会により地名由来板が立てられています。

カムイ口キの地名由来板

郷土の歴史を新得町郷土研究会がご紹介します
一緒に歴史の散歩に出掛けましょう

とくしん史歩歴散

No.40

旧屈足十勝川渡船場

今のように川に橋が架けられていなかった時代、渡船が川を渡る交通手段として大きな役割を果たしていました。

屈足十勝川渡船場（通称森渡船場）は、屈足村と音更村字クテクウシ（現鹿追町）とを結ぶ官設渡船場として明治40（1907）、屈足23号の十勝川右岸に設けられました。人を運ぶ船1艘と馬を運ぶ船1艘が配置され、人馬、物資を運ぶ足として利用されました。

大正5（1916）年に私設渡船場に移行となりましたが、翌年に渡船場の少し下流に屈足橋（現新清橋）が架けられたことから利用者が減少しました。そして、昭和3（1928）年に北海道拓殖鉄道の新得ー鹿追間が開通したことにより、さらなる利用者の減少が見込まれるため廃止となりました。

渡船場の初代管理人は森利三良で、その後谷本久太郎に引き継がれました。

大正末期から昭和初めにかけての子どもの頃に渡船場をよく利用した松浦昇は「船は結構大きく、十数人は乗れた。馬も馬車を付けて乗れるものもあった。当時は、谷本さんが船頭をしていて、対岸でお願いしたら、昼夜に関係なく船を出してくれた。船賃ははっきり覚えていないが、10銭から15銭くらいだったかね」と話されています。

渡船場跡には昭和61（1986）年8月、新得町教育委員会と新得町郷土研究会により史跡石柱が建てられています。

このほか、新得町内には明治末期に屈足42号に設けられた岩松渡船場がありましたが、昭和12（1937）年に吊り橋に変わり、その役目を終えています。

屈足十勝川渡船場の谷本船頭（左）

郷土の歴史を新得町郷土研究会がご紹介します
一緒に歴史の散歩に出掛けましょう

とくしん史歩歴散

No.41

上川灌漑溝水門遺構

屈足地区の稲作は、明治45（1912）年に森口忍により試作が始まり、大正4（1915）年に屈足土功組合、同6年には上川土功組合が設立され、稲作は徐々に地区全体へと広がっていきました。

稲作にとって水の確保は命といえるもので、屈足と人舞（清水町）両地区の水田2000町歩（約1983ヘクタール）に水を引いて土地を潤すため、上川土功組合は大正10（1921）年までに、約78万円をかけて上川灌漑溝（かんがいこう）を完成させました。

パンケニコロベツ川の水を利用するため、水門は同川が十勝川に合流する付近の屈足38号地先に造られました。水門から上川灌漑溝大幹線や支線に水が導入され、屈足や人舞の各農家の水田に引かれました。

このとき造られた大きな水門は、今もその姿をとどめています。

この工事には、タコと呼ばれた多数の土工労働者が働いていたことが、地域に伝えられています。

水門は昭和34（1959）年8月の集中豪雨で修復不可能な被害を受け、その使命を閉じました。

大正10（1921）年から約40年にわたって稲作を支えた水門遺構を後世に伝えるため、平成8（1996）年3月、新得町教育委員会と新得町郷土研究会により史跡由来板が立てられました。

上川灌漑溝水門遺構

上川灌漑溝水門遺構史跡銘板

郷土の歴史を新得町郷土研究会がご紹介します
一緒に歴史の散歩に出掛けましょう

とくしん史歩歴散

No.42

北海道拓殖鉄道「屈足駅」

十勝北部の地域開発と入植者の定住促進を図るため大正14（1925）年4月22日、東京市において資本金300万円で北海道拓殖鉄道株式会社が設立されました。直ちに第1期線の新得ー鹿追間の工事に取りかかり、昭和3（1928）年12月15日、鹿追までの営業運転が開始されました。

この時、屈足20号の南に屈足駅が開設され、地域住民にとっては大きな喜びとなりました。これまで、岩松やトムラウシから切り出された木材は、馬車鉄道（馬鉄）によって新得駅まで直接運ばれていましたが、屈足駅の開設によって、屈足ー新得間は拓殖鉄道が使われるようになりました。

敷設工事は順次進められていき、昭和6（1931）年11月15日、新得ー上士幌間54・3キロメートルが開通しました。

しかし、上士幌から足寄までの間は、建設費が捻出できないうえ、既に国鉄網走線（旧ふるさと銀河線）が開通していて利用が見込まれないため、同区間の免許を放棄しました。

その後、電源開発工事や新得営林署の設置により拓殖鉄道の利用が増加し、屈足市街も活気溢れる街並みとなりました。

昭和37（1962）年の台風により鉄橋や線路、トンネルなどに大きな被害を受け、さらに、トラック輸送とマイカーの急激な普及もあって利用が徐々に減少し、苦しい経営が続くことになりました。

こうした状況から鉄道の廃止が余儀なくされ、昭和43（1968）年7月31日、40年の歴史に終止符が打たれました。

屈足駅跡には平成15（2003）年11月、新得町教育委員会と新得町郷土研究会により史跡銘板が立てられています。

屈足駅を清掃する屈足南小学校児童（昭和30年代）

郷土の歴史を新得町郷土研究会がご紹介します
一緒に歴史の散歩に出掛けましょう

とくしん史歩歴散

No.43

新得営林署

十勝川上流部の森林開発は大正時代、王子製紙が紙の原料となる木材の伐採に着手し、川を使っての流送により搬出していましたが、戦後は戦災復興用材の需要が高まり、昭和25（1950）年から国が森林鉄道を敷設し、国の直営事業として伐採、搬出が行われるようになりました。

昭和29（1954）年、屈足緑町に清水営林署を分割して新得営林署が設置され、引き続き森林鉄道を使った木材の伐採、搬出が行われました。

昭和41（1966）年からはトラック輸送に切り替えられ、トムラウシ奥地まで延びた林道を利用して搬出が行われました。屈足、トムラウシ地区で生産された木材は「東大雪材」の銘柄で呼ばれ、良質材として北海道内各地に運ばれ利用されました。

屈足地区には多くの木工場が進出し、営林署や木材関係の従業員が増えたため商店街も発展し、木材の街としてにぎわいました。

最盛期の昭和51（1976）年ころには、営林署の職員だけでも300人余りを数えていましたが、外材の輸入、木材価格の低迷などにより伐採量が減少していきました。しかも、国全体の国有林野事業の財務状況の悪化により平成10（1998）年7月、国有林野事業の組織再編が発表されました。

新得営林署は、平成11（1999）年3月1日に暫定的に十勝西部森林管理署（帯広市）新得事務所となり、同13年8月1日、十勝西部森林管理署東大雪支署（上士幌町）に統合となりました。

新得営林署跡地には平成27（2015）年12月、新得町教育委員会と新得町郷土研究会により史跡銘板が立てられています。

新得営林署落成式（昭和31年）

郷土の歴史を新得町郷土研究会がご紹介します
一緒に歴史の散歩に出掛けましょう

とくしん史歩歴散

No.44

岩松駅逓所

ペンケニコロ川が十勝川に注ぐ辺りの岩松地区は、かつてはペンケ沢と呼ばれ、明治の末期から開拓が始まりました。大正6（1917）年には、王子製紙の下請け会社の中村組により十勝川上流部で製紙用木材の伐採が始まり、馬車鉄道（馬鉄）を敷設して木材の搬出を行うなど、人々の往来が活発になりました。

このため、大正15（1926）年3月27日、官設ペンケ沢駅逓所（後に岩松駅逓所に改称）が字屈足東1線232番地に開設され、岩野浅次郎が取扱人に選任されました。42坪（139平方㍍）の駅舎と官有馬2頭、55町歩（約55㌶）の牧場を有し営業が行われました。当時の取扱人の手当は月額5円で、後に10円に改正されたといわれます。

昭和14（1939）年に岩松ダムと岩松発電所の建設工事が始まり、工事関係者の出入りにより岩松地区はにぎわいを見せました。

昭和17（1942）年にダムと発電所建設工事が終了したことに加え、新規入植者が頭打ちになるなど利用者が減少したことにより、翌年の8月31日をもって駅逓所は廃止されました。

しかし、その後も民営により営業が続けられ、戦後のトムラウシ開拓に伴い、入植者の中継地として貢献しましたが、昭和23（1948）年8月31日にその使命を終えて廃止となりました。

この地には昭和61（1986）年8月、新得町郷土研究会により史跡標柱が立てられています。

岩松駅逓所（昭和7年8月）

郷土の歴史を新得町郷土研究会がご紹介します
一緒に歴史の散歩に出掛けましょう

くとん史歩し歴散

No.45

旧岩松小学校

岩松地区は明治43（1910）年、徳島県人の松浦金平、岡山県人の渡辺善太郎らが止若村（現幕別町）から入植し、翌年には香川県人の岩野伊平や岩野浅次郎らが御影村から来住して開拓が進められ、これに伴い、学齢期の児童が次第に増加していきました。

開拓者たちは大正2（1913）年6月、地域住民の寄付と労力奉仕により30平方メートル余りの柾ぶき掘っ立て小屋の校舎を建て、児童数12人で私立家庭教育所が発足しました。これが岩松小学校の始まりとされています。

私立家庭教育所は大正3（1914）年4月1日に屈足尋常小学校付属特別教授所として認可され、大正7（1918）年3月に89平方メートルの新しい校舎が建てられました。そして、翌年7月3日に、岩松尋常小学校として独立しました。

昭和14（1939）年に日本発送電株式会社による岩松ダムと岩松発電所の建設工事が始まると、児童数は100人を超えるまでに急増しました。このため、日本発送電の協力で仮校舎が増設されました。

昭和30（1955）年10月に361平方メートルの新校舎となり、昭和38年に開校50周年を迎えました。

しかし、急速な時代の移り変わりの中で児童数が減少し、昭和50（1975）年には児童数が5人となりました。このため、昭和51（1976）年3月31日、開校以来63年の歴史を閉じて屈足小学校に統合となりました。

学校敷地内には平成13（2001）年10月、新得町教育委員会と新得町郷土研究会により史跡銘板が立てられています。

岩松小学校（昭和46年ころ）

郷土の歴史を新得町郷土研究会がご紹介します
一緒に歴史の散歩に出掛けましょう

くとん史歩し歴散

No.46

岩松神社

新得町内のそれぞれの開拓地では、入植者の心の支えとして早い段階から神社・仏閣が建立されています。岩松地区では、一番近い屈足神社が祭礼の場所でした。

屈足神社は参拝に遠いため昭和2（1947）年ころ、地域住民の有志により八幡大神を祭神とした八幡神社が岩松尋常小学校のすぐ北の字屈足基線231番地の見晴らしの良い斜面に祀られました。

この八幡大神は、源氏の氏神として信仰され、後に武家の守護神になったといわれています。太平洋戦争の最中の昭和18～19（1943～1944）年ころ、ご神体が何者かに盗まれるという災難に見舞われました。

戦時中のことでもあり、急を要することもあって、地域住民は新得神社から分霊を受け、天照皇大神をご神体として祭り岩松神社としました。秋の祭礼の日は、屈足神社と同じ9月10日、11日と決められました。

社殿は山の中腹に造られており、お参りのためには急な階段を何段も上らなければなりませんでした。

その後、地域住民が高齢化し、お参りが大変になったことから、昭和63（1988）年4月、学校近くの平地に社殿が移されました。

しかし、離農や北海道電力の社宅の新得市街への移転など、社会の急激な変化の中で氏子の減少を招き、神社を維持することが困難になりました。

このため、平成10（1998）年4月21日、新得神社和田宮司による最後の祭礼が行われ、ご神体は新得神社に戻され、岩松神社の幕が閉じられました。

神社跡地には平成11（1999）年10月30日、新得町郷土研究会により史跡標柱が立てられています。

岩松神社（昭和61年）

郷土の歴史を新得町郷土研究会がご紹介します
一緒に歴史の散歩に出掛けましょう

とくしん歴史散歩

No.47

岩松発電所殉難者慰霊塔

昭和14（1929）年4月1日、戦時下における国による電力の統制のため、逓信省の下部組織として電気庁が新設され、同日、日本の電力会社を統合した日本発送電株式会社が設立されました。

発足した日本発送電は、国内で185万キロワットを水力により発電する5カ年計画を樹立し、この計画に基づき北海道で最初の水力発電所として岩松発電所が建設されました。

当初、発電量を3万3000キロワットとし、水力タービン機器類はドイツから輸入する計画でしたが、日本、ドイツともに風雲急を告げる状況になりました。このため、機材の輸入が困難になり、計画を変更して国産の6400キロワットのタービン1基、4600キロワットのタービン1基を設置することになりました。

工事は戦時中のため、計画どおりには進みませんでしたが、それでも昭和17（1942）年1月に1号機が完成し、同年2月には2号機が完成しました。当時の日本発送電は、世界的にも優れた技術水準を持っているため、岩松発電所には多くの視察者が訪れたといわれています。

工事期間中には大吊り橋が落下して朝鮮人などのタコと呼ばれた労働者数十人が犠牲になったほか、発電所までの排水管工事で殉職するなど多くの犠牲者が出ました。

このため、昭和16（1941）年10月、建設に関わる犠牲者を慰霊するため、日本発送電により発電所のすぐ南の小公園に殉難者慰霊塔が建てられました。

その後、昭和26（1951）年5月に電力の再編が行われ、岩松発電所は北海道電力株式会社に引き継がれ、慰霊塔は発電所の歩みを伝える碑（いしぶみ）として残されることになりました。

岩松発電所殉難者慰霊塔

郷土の歴史を新得町郷土研究会がご紹介します
一緒に歴史の散歩に出掛けましょう

とくしん歴史散歩

No.48

開発記念碑

かつて十勝川源流部に広がるトムラウシ地区は、新得市街から数十キロメートル以上も離れた奥地にあり、人を容易に寄せ付けない秘境の地でありました。

大正6（1917）年に、王子製紙の下請業者の中村組が、紙の原料となる木材の伐採・搬出のため岩松・トムラウシ地区に入りますが、開墾は手が付けられないまま、伐採跡地には切り株だけが残っていました。

その後、昭和10（1935）年に、新得町役場の吉尾与一助役以下40数人によりトムラウシ開発調査が実施されましたが、折しも前年の12月にトムラウシ地区一帯は大雪山国立公園に指定されたため、手が付けられずに推移しました。

トムラウシに初めて開墾のクワが下ろされたのは昭和21（1946）年3月、町内在住の柴田賢、原田藤三郎、高嶋助五郎の3戸の開拓者によるものでした。

彼らは、トムラウシ開発期成会の入植者募集に応募したもので、希望者200人の中から選ばれ、国鉄を退職してニペソツ地区に入植しました。

間もなく開始された林道開発に刺激されて開拓者が少しずつ増加し、昭和32（1957）年にはニペソツやキナウシのほかニペソツ支流、パンケベツ、ペンケベツなど合わせて5地区への入植者は50戸にのぼりました。

開拓10周年を記念して昭和32（1957）年10月10日、現地でトムラウシ開拓10周年記念式典が執り行われたほか、新得町により、富村牛小中学校の南西側敷地にトムラウシ地区の開発記念碑が建立されました。

碑は、玉石積の基礎の上に「開発記念碑」と刻まれた自然石が乗せられており、開拓時代の厳しさを今日に伝えています。

開発記念碑

郷土の歴史を新得町郷土研究会がご紹介します
一緒に歴史の散歩に出掛けましょう

しんとく歴史散歩

No.49

旧上富村牛小中学校

古くから開拓適地として注目されていたトムラウシ地区は、新得市街から40キロメートル以上の遠隔地にあり、しかも、地帯の北部が昭和9（1934）年に大雪山国立公園に指定されたことから、開発の手が付けられないできました。

戦後、満州（中国東北部）や樺太（カラフト）などから多くの日本人が引き揚げ、戦地の軍人の復員などもあり、国内で食糧増産の必要性が高まりました。

このため、トムラウシ地区が入植地に選定され、昭和21（1946）年に第1陣として開拓農家3戸が入植しました。

上トムラウシ地区にも昭和25（1950）年の10戸の入植を皮切りに開拓者の入植が続きました。

地域住民の増加で上トムラウシ地区にも学校設置を願う声が高まり、昭和28（1953）年11月、富村牛小学校上富村牛分校が開設されました。3年後の4月には中学校の分校も設置され、昭和32（1957）年4月に上富村牛小中学校として分離独立しました。

昭和38（1963）年に学校給食がスタートし、同42年に電気の導入、同46年に電話が開通されるなど、施設整備が進められました。

しかし、昭和37（1962）年の十勝岳の爆発を契機として離農者が増え始め、同35年に38人を数えた児童生徒は、同50年には8人へと減少しました。

地域や学校で協議した結果、昭和51（1976）年3月で閉校することが決まり、同年4月に富村牛小中学校へ統合になりました。小学生73人、中学生58人の卒業生を送り出し、地域の文化の拠点としての役割を担ってきましたが、時代の流れもあり、24年の歴史に幕が下ろされました。

旧上富村牛小中学校（昭和46年ころ）

郷土の歴史を新得町郷土研究会がご紹介します
一緒に歴史の散歩に出掛けましょう

しんとく歴史散歩

No.50

大原始林開拓苦闘碑

戦後開拓地としてクローズアップされたトムラウシ地区は、昭和21（1946）年に3戸の農家が入植して開拓が始まりました。

その北部に位置する上トムラウシ地区（ペンケベツ）には、昭和25（1950）年の10戸を皮切りに開拓者の入植が続きました。

ここには開拓者の入植以前から王子木材の十勝川上流伐採事業所があり、山の安全を願って山の神が祭られていました。上トムラウシ地区の開拓者たちは、それを開拓地の神社としてお祭りを行ってきました。

上富村牛小中学校の鈴木義男校長は昭和40（1965）年、この神社に代わる記念碑の建立を唱え、周辺の農家をはじめ、建設会社の現地事業所の協力を得て、学校敷地の東側に大原始林開拓苦闘碑を建立しました。

碑は十勝川から採取された自然石が使われ、題字は鈴木校長自らが揮毫しました。

苦闘碑の前には毎年住民が集い、郷土の繁栄が祈られました。

碑には昭和40（1965）年9月建立とありますが、碑の台座には昭和40年11月23日建立とあり、建立に関わった次の21人の名前が刻まれています。

武藤博、長屋鉄男、石栗七郎、北山兵治、館内直家、高木省吾、野地綱司、藤森寅之助、近藤一二、山崎勝三、小野才太郎、谷川元一、本間喜枝、武藤栄、笠島長太郎、浅井辰三、相馬勝三、藤崎勝、山崎孝良、高橋守一、佐藤亀太郎

（おわり）

「しんとく歴史散歩」を4年2カ月にわたり連載してきましたが、今号の50回をもちまして終了させていただきます。

拝読ありがとうございました。

新得町郷土研究会